

# 「カエサリアのバシレイオスの神学的思想について — 書簡からの考察 (その1)」<sup>1)</sup>

飯 田 仰

## はじめに

教会の営みと神学的構築の歴史は大変複雑であり豊かである。教会に仕えるためにこの学び舎で研鑽の日々を過ごしている我々にとって、この教会の歴史を学ぶことは、神の御言葉である聖書と共に孜々として研究を続けるべきものである。特に四世紀の教父たちが直面した課題と、そこから言語化されていった神学的思想は今日の我々にとっても大変示唆に富んだものであるばかりでなく、現代の教会の伝道と教会形成において裨益するところが大きい。

318年から公に展開されたアレクサンドレイアによるアレクサンドレイアのアレクサンドロスのキリスト論批判は当時の教会を震撼させ、その後の教会の営みに多大な影響を与えた。325年のニカイア公会議の後、381年コンスタンティノポリス公会議に至るまでその論争は激化したが、漸々と三位一体論が確立され構築されていく。だが、その過程において、教会は様々な神学的課題と挑戦を受け続けた<sup>2)</sup>。もっともそれが381年で完全に収束したわけではなく、その後も論争は継続されていくことは周知の通りである。

この激動の時代を歩み、神学的構築に貢献をしたのがカパドキア教父として知られている三人の内の一人、カエサリアのバシレイオスである。バシレイオスは第ニュッサのグレゴリオスと親友のナジアンゾスのグレゴリオスと共に後代ではカパドキア教父として親しまれている。日本では主に『聖霊論』で知ら

れている教父である<sup>3)</sup>。バシレイオスは、オリゲネスの弟子グレゴリオス・タウマトウルゴス（213頃-270頃）の優れた女弟子であった祖母マクリナ<sup>4)</sup>の薫陶を受けながら育ち、カエサリアやコンスタンティノポリス、更には当時の学問の中心地であったアテネでも学ぶ機会が与えられた。

バシレイオスの著作は比較的多く残存している。その中でも一際目立つのが、残存している彼の書簡の数である。著者の真正性に疑義が抱かれる書簡も多数あるが、現在、一般的に理解されているこれらの数は368通である。書簡は今までの研究においては傍証的な存在であったと言わざるを得ない側面があり、先行研究は主に主要著作に限られてきた傾向がみられ、書簡は彼の生涯を再構築する上で用いられてきた。もっとも著者の真正性を問う研究においては活発な議論が交わされてきたことは事実である。そのような中で、当論文においては、バシレイオスの書簡集から垣間見えるバシレイオスの神学的思想の傾向についての考察を試みたいと考えている。但し、ここでは、書簡集全体からというよりも範囲を狭め100までの書簡に限定し、その中から見られる神学的思想の傾向に焦点を合わせ、考察を行い簡単な紹介を試みたいと考えている。なぜならば、バシレイオスの神学の根底にある神学的思想が如何なるものであるのかをみることによって、彼の神学形成の形跡探究が可能となると考えるからである。

## バシレイオスの書簡について

実際に書簡の分類と紹介的考察を行う前に、まず古代ギリシャ・ローマ社会（以下、古代社会）における書簡の性質とバシレイオスの書簡について簡潔に確認しておきたい諸点がある。

カエサリアのバシレイオスは主要著作以外にも多くの書簡を綴った。その多くが現在に至るまで保存され写本されてきたのは驚きである。このことは一体何を示しているのであろうか。書簡を通してバシレイオスは何を達成しようとしたのか。そもそも古代社会において書簡とはどのような存在であり、その役

割は一体何であったのであろうか<sup>5)</sup>。

古代社会において書簡を書き送るという行為は比較的普遍的な現象として見られる。書簡は古代社会に早くから根付いた習慣であり、新約聖書もその大半が書簡によって構成され、当時既に書簡は社会の中で重要なコミュニケーションツールとしての役割を担っていたと言える。紀元一世紀に書簡を通して神学的内容が流布され、それが後代に語り継がれ、今、我々が手にしている新約聖書として形成されていった歴史がある。

エヴァレット・ファーガソン (Everett Ferguson) はこの書簡の役割を情報伝達の手段、嘆願や命令、指示などの伝達を実施するためのもの、そして私的な関係を保持するために利用されたものとしている<sup>6)</sup>。初期キリスト教にとって書簡は不可欠な存在であった。それは送付者と受信者の双方にとって、意思疎通を行うために無くてはならない手段であり、往々にして神学的議論がなされていったという伝統がある。

同時に考えなくてはならないのが、この書簡を通して、我々はどこまでその人物の素描を理解することが可能であるかということである。どこまで正確に、ある特定の人物の素性を正しく把握し、その知識を反映しながら、歴史神学的研究を進めるために一次史料として扱うことが可能なのか。この問いに対しても考察されねばならない。

ファーガソンは更に言及する。初期キリスト教にとって書簡とは、送付者と受信者の親しみ深い関係性を顕示する。よって、書簡でのやり取りが残存しているという「史実」が、家族としての教会像を鮮明に現わしているというのである<sup>7)</sup>。もしそうであるならば、その後の社会においても同様に書簡は関係性、特に家族としての関係性を示すものと理解され、バシレイオスの書簡を通して、送信者であるバシレイオスと受信者の間柄というものを鮮明にさせることが可能となり、それによってバシレイオスの人物像が更に明確になるとも考えられる。

アレクサンダー・リール (Alexander Riehle) の『ビザンティン書簡学：歴史的史料編纂的素描』(Byzantine Epistolography: A Historical and Historiographical

Sketch)で「書簡学 (Epistolography)」についての言及がなされている。これはビザンツ時代の書簡学についての書籍であるが、古代社会における書簡全般についての定義と理解が示されている。リールは、書簡とは、「特定の資料、伝達のおよび形式的要素のマトリックスによって定義される」と述べる<sup>8)</sup>。つまり、書簡には概ね標準化された形式や要素が含まれ、それによって書簡というジャンルが明瞭になるとリールは主張するのである。その標準化された形式や要素とは、宛名などの規範的表現、序章、繰り返されるフレーズ、従来のモチーフなどによって定義される<sup>9)</sup>。更にリールは述べる。書簡は私的なものから公的なものまでであるが、これらは元々の執筆目的がある中で、後代にその書簡が編纂され収集され一つの書物として写本されるようになり、そのために書簡というジャンルが変遷していったとリールは指摘する。つまり、書簡はそれ自体が元々保持していた目的がある中で、第三者によってそれが収集され纏められることによって、「フィクション的な書簡 (Fictional epistolography)」や「文学的书簡 (epistolary novels)」と呼ばれるような新たなジャンルにまで至ることがあるというわけである。これは特に四世紀以降に見られる現象であると考えられ<sup>10)</sup>、歴史神学研究の領域においても更なる探究が求められるものと思われる<sup>11)</sup>。

さて、バシレイオスの書簡集についてだが、書簡集として最後に収集され編集されたのはマウリスト・ベネディクト会 (Maurist Benedictines) によるもので、1721年から1730年の間に編纂され出版されたものと考えられている<sup>12)</sup>。歴史を辿ると1499年にアルダイン出版 (Aldine Press) によって出版された書簡集が嚆矢であると考えられている。その後、先駆的に批評的な書簡集が編纂された。1721年から1730年の間に上梓されたのがギリシャ語テキストにラテン語訳が並列された形態のものであり、マラン (Maran) が時代別に並列したことと、それらの書簡に番号を付記したことで、新しいベネディクト式番号付けが行われた。これは後に数世紀にわたる形態化を現実化させた。その後、20世紀においてはアヴェ・マリウス・ベシエレ (Abbé Marius Bessières) とC・H・ターナー (C. H. Turner)、そしてアンドレ・カヴァリン (Anders Cavallin) が

Studien zu den Briefen des hl. Basilius を出版したことによって更に深慮されるようになる。カヴァリンの研究によってはじめて書簡の徹底的な著者の真正性が問われることとなる。カヴァリン<sup>13)</sup>やヒューブナー（Hübner）<sup>14)</sup>、そしてP・J・フェドウィック（Paul Jonathan Fedwick）<sup>15)</sup>の研究成果によって、プロソポン、ヒュポスタシス、そしてウーシアの比較が綴られる「書簡38」はバシレイオスによるのではなく、弟のニュッサのグレゴリオスが綴った書簡であろうとの帰結へと至るなどの結論が出されることになる<sup>16)</sup>。その後はこの路線での研究が主流となったようであるが、1993年になりフェドウィックが書簡集 *Bibliotheca Basiliana Vniversalis*（『バシレイオス全図書』）を出版したことによって新たな潮流が生み出されることになる<sup>17)</sup>。

## 書簡<sup>18)</sup>からみるバシレイオスの神学思想の傾向について

ここからは実際にバシレイオスの書簡からみる彼の神学思想の傾向についての考察を行いたい。書簡をテーマごとに分類するのは主観的な要素が含まれてしまうことも否めないが、このような分類を行うことによってバシレイオス自身の内面的な側面と彼が直面した歴史的時代的神学的課題についても理解を深めることができると考える。そうすることで現代の我々にとっても有益な学びを与え得ることになると考える。

今回は6つの側面に分類してみることにする。分類は以下の通り。(1) 三位一体的側面、(2) 共同体／教会の一致的側面、(3) 哲学受容的側面、(4) 社会的救貧的側面、(5) 実践的修道士の側面、(6) ヴアルナラビリティ・弱さ (Vulnerability) 的側面と呼称する。

### (1) 三位一体的側面

バシレイオスは後に三位一体論を確立することに大きな貢献をした神学者として世に知られるようになる。しかし、不思議なことに彼は聖霊の神性について明言をしていない。その理由については未だ解明されたとは断言できな

い<sup>19)</sup>。とはいえ、書簡の中でも三位一体論的側面は随所みられる。

まずは「書簡9」を見てみよう。この書簡は哲学者マキシムス (Μαξιμῶ φιλοσόφῳ) に宛てられており、マキシムスがバシレイオスに対してアレキサンドリアのディオニシオスが綴った作品についての意見を求めたことに対する応答が記されている。冒頭の言葉が大変印象深い。「実に言葉は魂のかたちを現す (Εἰκόνες ὄντως τῶν ψυχῶν εἰσὶν οἱ λόγοι.)」。書簡を通して表現される言葉はその人の人柄を現すと述べているようである。そしてその言葉はその人の過ちさえも反映するという。ディオニシオスは後にサベリオス主義と呼ばれるようになるサベリオスを反駁しようとした人物である。ここでバシレイオスが問題としているのはこのディオニシオスにおけるホモウシオスの使用方法である。ディオニシオスは「父と子が存在において同一ではない (ὅτι οὐ ταὐτὸν τῷ ὑποκειμένῳ Πατὴρ καὶ Υἱός)」と示そうとしたが、彼はヒュポスタシスについての相違を確立させようとしただけでなく、ウーシアにおいても異なるとした (οὐχ ἑτερότητα μόνον τῶν ὑποστάσεων τίθεται, ἀλλὰ καὶ οὐσίας διαφορὰν)。それは「力の減少でもあり栄光の差異でもある (καὶ δυνάμειος ὕψειν καὶ δόξης παραλλαγὴν)」という。よってディオニシオスはホモウシオスに対して一定した態度を示していないとバシレイオスは糾弾する。しかしバシレイオス自身はどうかといえば、彼は「ウーシアにおいて同一 (τὸ ὅμοιον κατ' οὐσίαν)」という表現を「絶え間なく」(τὸ ἀπαρλλάκτως) という言葉が付加されることを条件に受容すると述べる。これはあのニカイアの教父たちが絶えず堅持した「ホモウシオスにおいて同一」であるという、あの「父より生まれ、光よりの光、まことの神よりのまことの神 (Φῶς ἐκ Φωτὸς καὶ Θεὸν ἀληθινὸν ἐκ Θεοῦ ἀληθινοῦ καὶ τὰ τοιαῦτα τὸν Μονογενῆ προσειπόντας)」との表現に準ずるものであるという<sup>20)</sup>。

ここでバシレイオスは実に興味深い表現を用いる。それは聖霊についての言及で、ディオニシオスが不適切な表現をしたというくだりにおいて登場する<sup>21)</sup>。「我々が礼拝する神《性》(θεότητος) から【それ】(αὐτὸ) [聖霊]を取り除く (ἐξορίζων) ことになる」という表現である。今までバシレイオスが聖霊

を神と呼ぶことがないことが問題視されてきたことは既に言及した通りであるが、ここでは「我々が礼拝する神（性）」という表現が聖霊に対してなされている。このような表現が存在することは注目に値する。バシレイオスの神学的思想において常にその背後にあったのは神が三位一体であり、父・子・聖霊が等しく、その本質において同一であるということの確信であったことが示されている。よって僅少でもそれを否定するような表現が使用されているところでは鋭敏に反応していたことがわかるのである<sup>22)</sup>。

## (2) 共同体／教会の一致的側面

次にバシレイオスが如何に教会という共同体を重視し、その一致を堅持することに奔走したかを見てみたい。「書簡54」と「書簡55」は教会という用語が他の書簡に比べても多く頻繁に使われている。「書簡54」の冒頭から教会が「無関心さ（τῆς ἀδιαφορίας）」によって壊滅的な状態に陥ってしまうことを危惧しているという内容が記されており、その理由が教会秩序の乱れにあった。そのため、バシレイオスが主張したのがニカイア公会議に関わった教父たちの基準（カノン）（εἰς τὸ ἀνανεώσασθαι τοὺς τῶν πατέρων κανόνας）なのであった。「書簡55」も同様にこの「基準」が根拠となって議論が進められる。バシレイオスは必ずといってよいほどこの教父たちが堅持した理解、ある種の伝統と言ってもよいものを根拠にすることを強調した。これが教会の一致を保持するためには必要であると理解しているのである。そして教会を清めるためには教会に相応しくない者たちを追放することも厭わず、相応しい者だけを認めるよう鼓舞したのである。

また、バシレイオスは単独で神学的論争を行うことはなく、周囲には「友」が大勢いたことが窺われる<sup>23)</sup>。書簡を多く綴り交換していたこと自体、活発な交流があったことを示していると考えられる。教会の一致を固持するためには、単独ではなく、「司教団」のような集団が存在していたことは多くの示唆を与える。

共同体の一致、教会の一致というものを強調したのには、バシレイオス自身

の神学的思想の根底に三位一体の神の一致がその思想的背景にあったからとも考えられる。父・子・聖霊なる神がひとりの神であるという理解こそ、ここで  
の共同体の一致堅持の姿に浸透している。一致を堅持することは書簡よりも  
『聖霊論』の第30章などで嵐の中の海戦に譬えられ描写されている箇所など  
において顕著に現わされている考え方であるが、他にも「書簡11、28、48」など  
で同様の教会の一致を求める内容が散見されている。

### (3) 哲学受容的側面

バシレイオスはコンスタンティノポリスやアテネといった当時の大都市で勉  
学に励んだ経験をもつ。よって、キリスト教以外の哲学や思想といったもの  
にも精通していたものと思われる。「書簡3」にはプラトンの『国家』からの引用  
と思われるフレーズが存在する。プラトンはこう述べている。

すべてこうしたことをよくよく考えてみたうえで、彼は、静かに自分の仕  
事だけをして行くという途を選ぶ。あたかも嵐のさなか、砂塵や強雨が風  
に吹きつけられてくるのを壁のかげに避けて立つ人のように、彼は、他の  
人々の目に余る不法を見ながらも、もし何とかして自分自身が、不正と不  
敬行為に汚されないままこの世の生を送ることができれば、そしてこの世  
を去るにあたっては、美しい希望をいだいて晴れ晴れと心安らかに去って  
行けるならば、それで満足するのだ<sup>24)</sup>。

バシレイオスはこの部分から「嵐に吹きつけられるのを壁のかげに避けて立  
つ人」という部分を引用しているのだが、これもプラトンの哲学に精通してい  
るから引用できたのではないかと推測される<sup>25)</sup>。

更に「書簡7」では「真理の擁護のためにあなた自身をささげよ (χρῆσαι  
σεαυτὸν ὀλοκλήρως τῇ συνηγορίᾳ τῆς ἀληθείας)」との表現も見られる。真理擁護  
をバシレイオスは重視した傾向があり、哲学受容の姿勢をこの目的のために実  
施するように促している。真理というものが「壁」のように我々を守るという

ことを述べようとしているようだ<sup>26)</sup>。

書簡からは逸脱してしまうのだが、『ギリシャ文学に関する若者たちへの助言（ΠΡΟΣ ΤΟΥΣ ΝΕΟΥΣ ὍΠΩΣ ἌΝ ἘΞ ἙΛΛΗΝΙΚΩΝ ὉΦΕΛΟΙΝΤΟ ΛΟΓΩΝ）』という著作の中でバシレイオスは蜜蜂の例えを用いる。そこで彼は蜜蜂が蜜を集める際に「選択」することに注目する。蜜をつくるのに相応しいものだけを抽出するその姿から、我々も魂に有益なものを哲学や文学といったものから抽出すべきだと述べる<sup>27)</sup>。このような比喩的表現はバシレイオス自身が如何に文学的哲学的教養をもつ者であったのかを物語り、こうした側面からも彼の傾向を鑑みることができる。

バシレイオスは非キリスト教的な知識をも有益であるならば積極的に取り入れようとした。そしてそれを書簡の宛先の相手に対しても推奨していたのである。こうした哲学的文学的要素は弁証的修辞学的に神学をする素養を身に付けていたと考えられる。

#### (4) 社会的救貧的側面

「書簡4、6、15、32、33（借金問題）、37（物質的支援の要請）、53（金銭面のトラブル）」は、金銭的トラブルに直面していた人たちの救済活動にバシレイオスが積極的に関わろうとした姿勢を窺わせる。バシレイオスは当時の他の司教たちもそうであったように、社会的弱者の救貧活動に自身の活動の拠点を置いた<sup>28)</sup>。彼が始めた「バシレイアス」は有名であり、368年から370年の間にカパドキア地域を襲った大飢饉に対してバシレイオスが示した組織的社会的事業がこの「バシレイアス」という宿泊先・救貧院・病院の複合施設である<sup>29)</sup>。ピーター・ブラウンはこのことを次のように評価している：

修道士たちは、非社会的な隠者或いは放浪するカリスマ保有者集団として荒野に引きこもっているべきではなく、むしろ貧者の世話をして、自分自身の貧困という手本によって、富者たちをより一層の施与へと駆り立てるべきだ、と。もはや社会の周縁にとどまらずに、救貧を事とする修道院は

都市や村落に設立されるべきだ、と。これらすべてにおいてバシレイオスは、以前のより過激だった世代の禁欲主義を温和化したのだ、他方で説教において、また修道的貧困についての自らの見方において、富に対するラディカルな批判と、そのような禁欲主義のリーダーたちの特徴を成してきた貧者への関心といったことを保ったのだ<sup>30)</sup>。

ここで見られるバシレイオスの傾向は、既存の制度（修道制）の方向性を修正しつつ、眼前の社会的リアリズムとの狭間で均衡状態を生み出す方途を見出したということなのではないかと思われる<sup>31)</sup>。彼は社会的システムと神学的理解及び実践の両立を目指そうとしたのではないかと思われるが、そのような側面も彼の書簡の中から垣間見ることができるのである。

#### (5) 実践的修道制的側面<sup>32)</sup>

上記で触れた修道制的要素はバシレイオスにとっての関心事であったことは間違いない。「書簡2」は親友ナジアンゾスのグレゴリオス宛に送られた書簡であるが、ここでは私的な側面が鑑みられる。バシレイオスはここでグレゴリオスに修道的生活を勧奨する。具体的には、聖書を読み黙想すること、祈りに専念すること、そうしたことのためにも喧騒な都会での生活から人里離れた場所へと隠棲することなどである。この「書簡2」はバシレイオスとグレゴリオスの深い、しかし少々複雑な友情関係をも示唆する内容となっており、これは一人の人物の内面を探る上でも有益である。

更に興味深い書簡が「書簡46」である。この書簡は「墮落した少女（Πρὸς παρθένον ἐκπεσοῦσαν）」という宛名が記されているのだが、これは、一度は自らを主に完全に委ね献身した女性が（恐らく修道的生活を生涯まっとうすることを宣言したと思われる）、その途中で「恋」に陥り修道的生活から逸脱した者に対してのバシレイオスの言葉が綴られているものである。研究者の間ではこの女性とはバシレイオスの妹であると考えられている。バシレイオスは献身的歩みを重視した。それは祖母の大マクリナと母、また姉の小マクリナの

影響を受けた結果なのかもしれない。祖母のこと、母のこと、そして姉のことを想起せよとも述べているところからすると、恐らくそうした想いを表現しているであろう。バシレイオスは盛んに最初の献身の思いを忘れず、そこに立ち帰ることを促す。そして最終的には終末論的言及へと進む。神の子がその栄光とともに天使を携えて来る時のことを想像してみよという。主は生きているものも死んだものも裁かれ、それぞれの行いによって報われるのであるから、そのことに思いを寄せよという。そして述べる、あのダニエルが見た幻（ダニエル書7:9-10）にあるように「日の老いたる者」の御前に進み出て裁きを受けるのだからそのことをよく吟味せよと。ただ、それは罪人を救うためにこの世に来られたイエス・キリストによってのみ救われる。だからこそ、悔い改めてこのお方のもとへと来なさい、ひれ伏し、伏し拝みなさい（詩編95:6）というのである。この書簡の最後の部分では聖書からの引用が多数用いられているのだが、最後にルカによる福音書第15章の「放蕩息子」のたとえの最後の言葉を振りながらこう述べる：「わたしの娘は死んでいたのに生き返った。いなくなっていたのに見つかったのだ。祝宴を開いて楽しみ喜ぶのは当たり前ではないか」（cf. ルカ15:32）。このように悔い改めを促すような内容を全面的に打ち出しているのは、その対象が自らの家族であるからなのか、それとも別の理由なのかは明確ではないが、明らかに修道的生活を一度は選んだ者に対しての思い入れと感情が込められているのは確かである。バシレイオスは祖母や自らの母親、更には姉マクリナに宛てた書簡を送っていない。或いは彼女たち家族へ宛てられた書簡は意図的に残されなかったと考えることもできる。いずれにしても、この妹に対してだけはこうして書簡が残されたということは、それだけバシレイオスが修道的生活と主への献身を重視していたことを暗示していたと見て取れる。彼の神学が単に学問的なものに留まらず、深い信仰から発出するものであることがここからも読み取れる。

## (6) ヴァルナラビリティ・弱さ (Vulnerability) 的側面

バシレイオスは決して強靱な身体をもっていたわけではなさそうである。特に晩年は病弱な状態であったようで、繰り返し自らの病や病弱な体質、そして闘病状態について赤裸々に綴っている。「書簡27」や「書簡30」がその典型であるが、彼は病（及び季節の理由）のために予定していた訪問旅行を断念せざるを得なかったということを記している。自らの弱さを包み隠さずに述べることができるのはある意味その内側にある強靱さを描き出しているといえることができる。パウロがそうであったように、まさに弱さの中でこそ力が発揮されるという言葉が彷彿させる。こうした苦悩をバシレイオスは祈りの機会として捉え、神に委ねる姿勢を貫徹しようとする。そして「書簡30」では母親エンメリアの召天についても触れ、それが如何に自分にとって打撃の大きいものであるのかについて言及している。

バシレイオスはこうした自らの身体的精神的弱さを教会の状態にも当て嵌めながら語る：「教会のために、神のご加護を切に願う（ὥστε μὴ ἀποκάμης προσευχόμενος ὑπὲρ τῶν ἐκκλησιῶν καὶ δυσωπῶν τὸν Θεόν）」。自らの弱さと教会の衰弱した状態への危惧といったものを関連付けて述べている点は彼の神学的思想の傾向の一つと言えるのかもしれない。この弱さを克服するためには神ご自身に目を向け希望を見出すように鼓舞している様子が見える。

## おわりに

当論文ではバシレイオスの書簡のごく一部を簡潔に紹介しながら彼の神学の根底にある神学的思想の傾向をみてきた。ここでまとめるならば以下のように表現できると考える。(1) バシレイオスは熾烈な三位一体論争に巻き込まれていく中でニカイアの伝統を固守しようとしていた。三位一体論、特に聖霊の神性については慎重な立場を固持したが、それは三位一体の神を否定することではなく、むしろ慎重さゆえの表現の問題であり、我々の礼拝との関連において聖霊も御父と御子と同質であることを主張した。(2) バシレイオスは一

人で神学を行うことはなく、「友」の存在を重視し、教会の一致を常に意識しその一致を堅持しようと奔走した。(3) ギリシャ哲学や文学などから神学形成と信仰生活に有益と思われる内容は積極的に取り入れ、そのことを周囲の者たちにも推奨し鼓舞した。(4) 生活面における様々な課題に対して指導者として積極的に関わることを厭わず、自らの神学的信仰的理解を特に救貧活動において反映させた。(5) 実践的な側面と信仰態度に重きを置き、特に身内の者でその信仰的確信に疑いがある場合は厳しめの言葉と共に聖書の御言葉から愛をもって真理を語り悔い改めへと導こうとした。そして(6) 自身の弱さに対する不安及び危惧と教会の脆弱さと痛みを関連付けて常に考え、教会の秩序を守ることを第一とした。

バシレイオスは司教として、神学者として、説教者として<sup>33)</sup>、またキリストの僕の一人として、その生涯全体を通して神学構築と教会形成に没頭した人物であると言ってよいと考える。それは決して机上の空論に終わるようなものではなく、生き様そのものを通して、実践面においてもその神学的理解から至る帰結をもとに生き抜いた神学者であったと言えるのではないだろうか。その点において彼の書簡は現代の我々にも多くの示唆を与え続けているものであると考えられる。

当論文ではまだ踏み込めなかった要素が多々残存するが、今後更なる探究を行い続けたいと願う。こうした一次史料を読み続けることは地道な作業である。しかし、このような探究の積み重ねによって与えられる様々な発見が、歴史神学の営みの感慨深いところなのではないかと思つづく感じる。

(いいだ あおぐ)

## 注

- 1) 当論文は東京神学大学博士課程後期課程研究発表（2022年6月21日）にて発表した内容を加筆修正したものである。
- 2) この背景の詳細については以下を参照のこと。R.P.C. Hanson. *The Search for the Christian Doctrine of God: The Arian Controversy, 318-381*. Grand Rapids, MI: Baker Academic, 1988, 特に pp. 3-172, 791-875. Lewis Ayres. *Nicaea and its Legacy: An Approach to Fourth-Century Trinitarian Theology*. Oxford: Oxford University Press, 2004, 特に pp. 11-20, 244-269.
- 3) 邦訳では、山村敬訳『聖大バシレイオスの「聖霊論」』キリスト教歴史双書16（南窓社、1996年）がある。他には『ヘクサエメロン（創造の六日間）』や『エウノミオス反駁』なども主要な研究すべき史料としてある。筆者は現在、後者の邦訳を試みている。
- 4) バシレイオスの姉の名もマクリナであり、祖母を「大マクリナ」、姉を「小マクリナ」と呼ぶこともある。ちなみにバシレイオスの父親も同名のバシレイオスである。母親エンメリアは殉教者を父にもつ篤信家であった。10人いた子どもの内、バシレイオスと弟のグレゴリオス（ニュッサ）、もう一人の弟ペトロス（セバステイア）が後に主教となる。山村、13-15頁参照。
- 5) 書簡については書簡学（Epistolography）という研究分野が存在する。書簡とはどのジャンルに当て嵌められるのであろうか、学問的にそれをどのように俎上に載せるべきなのか、それには何が根底に必要であるのかなど、学問的議論が交わされ続けている。学問上、どのような位置づけと理解がなされ理論付けられるべきなのであろうか。こうした一連の問いに答えるのは容易ではないので、当研究発表では割愛し、この方法論についての探求は今後の課題として残すこととする。
- 6) Everett Ferguson, *Backgrounds of Early Christianity*, 3<sup>rd</sup> ed, Grand Rapids, MI: Eerdmans, 1987, 2003, p. 125.
- 7) Ibid.
- 8) Alexander Riehle, *Byzantine Epistolography: A Historical and Historiographical Sketch*, Brill: Leiden, 2020, p. 1.
- 9) Ibid., p. 2.
- 10) Ibid., p. 3.
- 11) 「書簡は一つの独特なジャンルなのか。或いは形式なのか。更には一つのモードというべきなのか。もしジャンルという理解が、書簡を、文化的時代的制限

をくだされた空間の中で収集されたテキストであると見做すのであれば、また、その文化における著者及び公の社会によって凝集性が保たれ、解釈上の骨組を同時代の人々に提供しているものであるとするならば、それは一つのジャンルであると理解して良い」とリールは述べる（p. 5）。もしそうであるならば、「書簡は一定の文化的時代的空間的制限の中で保たれる一つの特異なジャンルと位置付けることが可能であると言えるのではないか。ただそれは、時代が変わる毎に解釈も変遷することになり、後代による理解と解釈においては、元来保持されていた目的或いは意図されたものとは異なる理解が生まれる可能性も否定できないことも同時に認識しておく必要がある」とリールは言う。いずれにしてもリールの主張は長考に値する。だが、彼は同時に「ジャンル」という概念について警鐘を鳴らしていることも事実である。「もっともジャンルとは、フuzzyなエッジを含む概念であり、明示的または暗黙的に、或いは意識的または無意識的なハイブリッド性というものも、本質的に内接されていることは確かである。」（p. 5）とも述べている。ジャンル理解そのものの確立は困難な側面もあることながら、書簡という媒体がどのように理解されているのか、また理解されてきているのか、更に学問上、どう捉えられるべきなのかを問うことは重要な点であると言える。

一人の歴史上の思想家や神学者を理解しようとする試みは、その人物が残した著作を通してでしか我々にはできない学問的作業である。ただ、ここで深い示唆と洞察を与えられるのが、芦名定道の博士論文『P.ティリッヒの宗教思想研究』（1994年）に記されている方法論についての内容である（この内容は朴大信先生からご教示いただいた）。芦名はP.ティリッヒ研究で有名であるが、その方法論についての言及をする際に、有賀鉄太郎の『オリゲネス研究』に言及する。ある人物の思想理解を目指す過程において、「トータルな理解」を目指して初めてその理解は可能になると芦名は述べる。そこで有賀の見解と認識に触れるのであるが、有賀はエフェソの信徒への手紙のことば「キリストの愛の広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解し」（3:18）に依り、研究対象の人物の「その思想と行為の根底にある人格の理解」（1頁）を目的とする時に、この「広さ、長さ、高さ、深さ」が重要な役割を担うのだという。芦名は例えばティリッヒ自身の人格の「広さ、長さ、高さ、深さ」を解明することによってその研究の目的は成し遂げられると述べる（1頁）。この指摘はバシレイオス研究にも適応されると考える。バシレイオスの思想的背景と実体をその生涯、時代背景、著作から理解しようとする試みの際に、彼の書簡という非常に私的であり公的

であるコミュニケーション媒体をも通して、バシレイオスの人物像理解が促進され深められるのである。更に、バシレイオス自身の信仰理解と実践そのものから解明していくことを著者も目指したい。

- 12) Anna Silvas, "The letters of Basil of Caesarea and the role of letter-collections in their transmission" in Bronwen Neil and Pauline Allen, eds. *Collecting Early Christian Letters: From the Apostle Paul to Late Antiquity* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015), p. 113. 新しい書簡集の編集プロジェクトの企画案 "Basillii Caesariensis Opera" が検討中であるが、まだ企画段階で現実には始動していない。
- 13) Anders Cavallin. *Studien zu den Briefen des hl. Basilius*. (Lund: Gleerupska Universitetsbokhandeln, 1944), 71ff.
- 14) Reinhard Hübner. "Gregor von Nyssa als Verfasser der sog. Ep. 38 des Basilius. Zum unterschiedlichen Versatandnis der ousia bei den kappadozischen Brüdern" in *Epektasis. Mélanges patristiques offerts au Cardinal Jean Daniélou*, eds. J. Fontaine and Ch. Kannengiesser (Paris: Beauchesne, 1972), 463-490.
- 15) Paul J. Fedwick. "A Commentary of Gregory of Nyssa or the 38<sup>th</sup> Letter of Basil of Caesarea," *Orientalia Christiana Periodica* 44 (1978), 31-51.
- 16) Silvas, 115-6. Also see Lucian Turcescu. "Prosôpon and Hypostasis in Basil of Caesarea's *Against Eunomius* and the Epistles," in *Vigiliae Christianae* (51), 374-395.
- 17) こうした書簡学 (Epistolography) はそれ自体大変興味深い研究分野であるが、当研究はバシレイオスの神学的思想の傾向考察に重点を置いているため、込み入った議論の展開は割愛しておく。ただし、バシレイオスの当時の生活様式や社会環境などを理解するためにも書簡集は大変有益で、特に「書簡223」のような自伝的な書簡からは多くのことを学ぶことが可能である。ちなみに、バシレイオスは大変優れた行政官 (管理官) であったと考えられ、彼が記録のために自らの書簡のコピーをファイリングして保管しておいたはずであるとのシルヴァの指摘はバシレイオスという人物を知る上でも大変興味深い情報であると思う (Silvas, 119-120)。

また、古代社会の書簡を読む意義について「キケロー書簡集」(岩波書店、2006年、2018年第2刷)の編纂者高橋宏幸の解説は有意義である。高橋曰く、書簡とは「時代の証言という歴史的価値に見出される」(539頁)ものであり、書簡を通すことによって公的な側面だけではなく私的な側面が豊かに現れると言及している。「当時の家庭との暮らしや友人とのつきあい、さまざまな娯楽、行

事、慣習など、より身近な生活を窺い知る資料となる」（540頁）と高橋は主張する。さらに、書簡はその筆者たちの「素顔の人間性」や「苦悩や悲嘆」といった側面さえも包み隠さず吐露することさえある。このことによって「心の内面は決して杓子定規の論理だけで動くことはない」（540頁）ことを示している。もっとも高橋の研究対象は古代ローマの著名人であるキケローであるが、同様のことがカエサリアのバシレイオスにも適応されるのではないかと考える。

高橋はさらに次のようにも述べている。「手紙は本来、差出人と名宛人という当事者にも関わらず、手紙が書かれるときに第三者がこれを読むことは（最初から公開を意図した場合は別として）前提とされていない。それが公開されて広く読まれるようになる大きな理由としては、先に見た時代の証言の他、そこに驚嘆や憐憫などの感情を喚起して人の心に訴えるもの、あるいは、誰にとっても教訓となるような人生訓や哲学的教えが含まれているといったことが考えられる」（568頁）。この点は古代教父研究においても有意義な視点であり、なぜ後代に残され読み継がれたのかを考察する上で多くの示唆に富んだ指摘をしていると思われる。そもそも古代社会における書簡とは、教訓を伝えるなどの形式において長い伝統を有しているとされる（568頁）。この点、古代教父もギリシャ・ローマ文化の影響下でこのような媒体を用いて情報伝達を行っていたと理解されると考える。

- 18) 当研究発表では以下の書簡集を主に用いた。 *Saint Basil: The Letters: Greek* Vol. 1. E. Capps, T. E. Page, W. H. D. Rouse, & G. P. Goold, Eds. William Heinemann; G. P. Putnam's Sons; Harvard University Press, 1926-1934.
- 19) 「書簡8」には三位一体論的表現がなされており（ $\delta\epsilon\omicron\nu\ \omicron\mu\omicron\lambda\omicron\gamma\epsilon\iota\nu\ \Theta\epsilon\omicron\nu\ \tau\omicron\nu\ \Pi\alpha\tau\epsilon\rho\alpha$ ,  $\Theta\epsilon\omicron\nu\ \tau\omicron\nu\ \Upsilon\iota\omicron\nu$ ,  $\Theta\epsilon\omicron\nu\ \tau\omicron\ \Pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\ \tau\omicron\ \acute{\alpha}\gamma\iota\omicron\nu$ ,  $\acute{\omega}\varsigma\ \omicron\iota\ \theta\epsilon\iota\omicron\iota\ \lambda\omicron\gamma\omicron\iota\ \kappa\alpha\iota\ \omicron\iota\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron\upsilon\varsigma\ \upsilon\pi\eta\lambda\omicron\tau\epsilon\rho\omicron\nu\ \nu\epsilon\nu\omicron\eta\kappa\omicron\tau\epsilon\varsigma\ \acute{\epsilon}\delta\iota\delta\alpha\chi\alpha\nu$ ）、これがどのように把握されるべきなのか、当研究の著者はまだ結論に至っていない。ただ、先行研究として Robert Melcher. *Der 8: Brief des hl. Basilius, ein Werk des Evagrius Pontikus* (Volume 1 of Beiträge, Münsterische, zur Theologie (1923) がある。残念ながらもまだ入手ができず、未読である。メルヒャーは「書簡8」の真正性に疑義を呈している。
- 20) 「書簡51」ではニカイアに集結した318名の教父たち（ $\tau\omicron\nu\ \mu\alpha\kappa\alpha\rho\iota\omega\nu\ \acute{\epsilon}\kappa\epsilon\iota\omega\nu\ \acute{\epsilon}\pi\iota\sigma\kappa\omicron\pi\omega\nu\ \tau\omicron\nu\ \tau\rho\iota\alpha\kappa\omicron\sigma\iota\omega\nu\ \delta\epsilon\kappa\alpha\omicron\kappa\tau\acute{\omega}$ ）についての言及があることは大変興味深い。
- 21) “ $\pi\rho\omicron\varsigma\ \delta\epsilon\ \tau\omicron\upsilon\tau\omicron\iota\varsigma\ \kappa\alpha\iota\ \pi\epsilon\rho\iota\ \tau\omicron\upsilon\ \Pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\omicron\varsigma\ \acute{\alpha}\phi\eta\kappa\epsilon\ \phi\omega\nu\acute{\alpha}\varsigma\ \eta\kappa\iota\sigma\tau\alpha\ \pi\rho\epsilon\pi\omicron\upsilon\sigma\alpha\varsigma\ \tau\acute{\omega}\ \Pi\nu\epsilon\upsilon\mu\alpha\tau\iota$ ,  $\tau\eta\varsigma\ \pi\rho\omicron\sigma\kappa\nu\nu\omicron\mu\epsilon\nu\eta\varsigma\ \alpha\upsilon\tau\omicron\ \theta\epsilon\omicron\tau\eta\tau\omicron\varsigma\ \acute{\epsilon}\xi\omicron\rho\iota\zeta\omega\nu\ \kappa\alpha\iota\ \kappa\acute{\alpha}\tau\omega\ \pi\omicron\upsilon\ \tau\eta\ \kappa\tau\iota\sigma\tau\eta\ \kappa\alpha\iota\ \lambda\epsilon\iota\tau\omicron\upsilon\rho\gamma\acute{\omega}\ \phi\upsilon\sigma\epsilon\iota\ \sigma\upsilon\nu\alpha\rho\iota\theta\iota\mu\acute{\omega}\nu.$   $\acute{\omicron}\ \mu\epsilon\nu\ \omicron\upsilon\nu\ \acute{\alpha}\nu\eta\rho\ \tau\omicron\iota\omicron\upsilon\tau\omicron\varsigma.$ ” *Saint Basil: The Letters: Greek*, (E.

Capps, T. E. Page, W. H. D. Rouse, & G. P. Goold, Eds.; Vol. 1, p. 92). William Heinemann; G. P. Putnam's Sons; Harvard University Press.

- 22) 「書簡9」以外にも「書簡16」や「25」(更に「書簡189」や「360」)などは三位一体的側面の議論が展開されており、今後更なる検証を要する。ただし、「書簡38」同様、「書簡360」などは著者性に疑義がある。しかし、「書簡360」にも「この神を礼拝する」とのフレーズがあるため、今後更なる検証が求められると考える。
- 23) 「書簡92」では以下のように大勢の「友」の名前が列挙されている。Μελέτιος, Εὐσέβειος, Βασίλειος, Βάσσος, Γρηγόριος, Πελάγιος, Παῦλος, Ἄνθιμος, Θεόδοτος, Βίθος, Ἀβραάμιος, Ἰοβίνος, Ζήνων, Θεοδώρητος, Μαρκιανός, Βάραχος, Ἀβραάμιος, Λιβάνιος, Θαλάσσιος, Ἰωσήφ, Βοηθός, Ἰάτριος, Θεόδοτος, Εὐστάθιος, Βαρσοῦμας, Ἰωάννης, Χοσρόης, Ἰωσάκης, Νάρσης, Μάρις, Γρηγόριος, Δαφνός, ἐν Κυρίῳ χαίρειν.
- 24) プラトン『国家(下)』(岩波書店、1979年、2007年第43刷発行)、第6巻10、50頁。
- 25) 「書簡135」でもプラトンや著名哲学者たちが反面教師的役割となるということが記されている点も興味深い。
- 26) 2022年4月1日に行われた東京神学大学入学式式辞で芳賀力学長が触れられたグレゴリオスのパラマスによるバシレイオス引用がここにも関連すると考えられる。バシレイオスの詩編注解からの引用であるが、以下のような内容となっている:「われわれは真理の二つの意味を見出した。一つは、幸いな生を送る人々が把握するもので、もう一つは世界のうのかくかくしかじかのものについての健全な知である。前者は救いにかかわる真理に寄与し、完全な人間の心の中にあつて、隣人にそれを混じり気なく伝える。地と海、星々や、それらの運動や速さについては、たとえそれらのものうちにある真理をわれわれが知らなくとも、われわれにとって約束された至福に達するのに何の妨げにもならない」。パラマスはこれを『第七詩篇講話』からとしているが、第七ではなく第十四からの引用であると翻訳者の大森が脚注で指摘している。当論文の筆者もその内容を確認した。G.パラマス『東方教会の精髓 人間の神化論攷:聖なるヘシユカストたちのための弁護』大森正樹訳(知泉学術叢書2、2018年)、50-51頁。
- 27) 原文: ὡς γὰρ τῶν ἀνθέων τοῖς μὲν λοιποῖς ἄχρι τῆς εὐωδίας ἢ τῆς χροῶς ἐστὶν ἡ ἀπόλαυσις, ταῖς μελίτταις δ' ἄρα καὶ μέλι λαμβάνειν ἀπ' αὐτῶν ὑπάρχει.
- 28) ピーター・ブラウン『貧者を愛する者:古代末期におけるキリスト教的慈善の誕生』戸田聡訳(慶応義塾大学出版会、2012年)を参照。古代世界においては

## カエサリアのバシレイオスの神学的思想について－書簡からの考察（その1）

司教たちが教会の指導者として、また都市での権力者の立場から喜捨する存在としてその職務をまっとうした。司教が救貧活動のために行政官として民の生活を守るという役割も果たした。本城仰太先生からこの点をご教示いただいた。アウグスティヌスの書簡からも同様の内容が確認されることをご指摘いただいた。バシレイオスの書簡でも類似した内容が散見される。古代社会の救貧活動については、「フィランスロピア」理解が重要であるとの指摘が土井健司『救貧看護とフィランスロピア—古代キリスト教におけるフィランスロピア論の生成』（創文社、2016年）によってなされており大変有益である。

- 29) ブラウン、64-65頁。
- 30) ブラウン、66頁。
- 31) 同上。
- 32) 書簡16、22、42、43、45などがこの側面において挙げられる。
- 33) バシレイオスの説教及び聖書講解についても今後更なる探究が求められる。この点も大変興味深いと思う。